

町長

ひとりごと

86

齊藤

讓



風の強い、冬の寒い日であった。いま建設をすすめている公園の工事現場で、二人の作業員が、黙々とブロックを積んでいた。「ご苦労さまです。寒いですね。」と声をかけると、「はい、どうも寒いね。」といかにも純朴て人のよさそうな顔が、私を見上げた。発した言葉には、強い東北訛りがあった。二人とも私とは幾つもちがわない五十代半の年輩のようである。聞けば、秋田県からこの工事現場に働きにきているということであった。「あなた方は、寒さに慣れているから、こちらの冬はあまり寒さを感じないでしょうね。」という「いやあ、俺の方では雪が積ってしまくと、そんなに寒さは感じないが、こっちの風のほうがよっぽど

冷てえな。」と笑った。四月十五日まで、この現場で働くのだという。「たまには、お国に帰りますか。」と聞けば、「今まで一度も帰っていません。遠いからよ、多分期限まで帰ることはねえよ。」あたかも、はるか遠い故郷の家族を偲ぶような淋しい陰が、赤銅色の顔を過っていった。

▼昨年、東北地方の米作は、冷夏によって壊滅的な打撃を受けた。米の単作地帯であるが故に、その被害は深刻で、テレビでも苦悩する農民の姿を、度々放映していた。政府も、これらの地方への公共事業を増やし、農外所得の道を確保するいわゆる失業対策を講ずると発表していた。果して、その結果はどうなったのか定かたではないが、いずれにしても十分な成果を期待することはできないであろう。こ

のお二人のように、故郷に長く家族を残し、遠い異郷の地で単身働くお父さん達は、大勢いるにちがいない。経済大国といわれる日本ではあるが、こんな狭い国土で、今なおこのよ

うな地域間格差が、依然として存在しているのである。このよう

な人達に比べて、温暖な地である千葉県、そしてわが光町に住む人々は、なんと恵まれた環境下にあることであろうか。たしかにこの地も、東北地方同様に昨年は米の不作に泣いた。しかし、農業形態が複合経営であることから、農家収入に



占める米の割合は低下しており、その影響度合いは、彼の地とは比べものにならないほど小さい。特に光町では、幸いにして主要作目である秋冬ネギの価格が、異常なほどの高値となり、米の減収分を補って余りある状況となった。また、農外所得を求めて働く人も、不況で雇用情勢が厳しくなつたとはいえ、家族を置いてまで単身働きに出る必要

降った。その日の朝、私は家人の「大雪だ」という声に目覚めた。前日は結婚式に出席して、帰宅するなり白河夜船となり、まったく雪の気配すら気付かなかった。覚えさらぬ酔眼に映った庭の木立は雪に埋まり、辺り一面銀世界と化して、いまなお激しく粉雪が舞っていた。私は夕方に予定している会議のことが気になつて、東陽地区の主催者に問い合わせた。相手は怪訝そうな声で、「そうですね、テレビで大雪になるといっていますからね。」とどうも緊迫感がないのである。よく聞いてみると、こちらは雨が降っていて、雪の気配はないという。私はとても信じられなかったが、無論相手も信じられなかったようである。それにしても、こんな小さな町でさえ、所

もないのである。この恵まれた、地の利の中で生活できる幸を、私達には忘れてはいけないだろうか。神に感謝しなければならぬ。

▼二月半、関東地方に、二十数年振りだという大雪が

いつしか遠い子供の頃が、甘い感傷を伴って思い出されてくる。あの頃の村には、子供が大勢いた。今日のようにテレビやファミコンも無く、塾通いもなかった。だから子供は、常に家の外にあった。雪が降れば物珍しく、誰かいうとはなしに上は中学生から下は就学前の小僧までが一団となつて、雪の中を遊び動きまわった。あの時の雪と今日の雪には、何の変わりもないのに、戻りたくても戻れないあの頃の世界。

テレビは、ひっきりなしに鉄道や、高速道路の不通を告げている。雪は、科学技術の虜になった私達を、まるで嘲笑するかのよう

出稼ぎの多い東北地方の町村役場の中には、各地の雇用主に、「雪下ろしなどで、家族から連絡があった時は、是非すぐ帰してあげて下さい。」と頭を下げてまわるところもあるという。身につまされるような悲しく、切ないはなした。